

●特別賞〔論文概要紹介〕

だれにでもできる 発達障害児の支援 メソッドの実践

茨城県日立市教育研究所 おおち ひとし
大地 斉

【実践の概要】

発達障害で苦しんでいる子どもが、毎日のように「こども発達相談センター」にやってくる。その数、毎月100名弱。一人ひとりの“困り感”は違っている。持って生まれた特性のために、困ったり悩んだり苦しんだりしている子どもの実態をしっかり受け止め、一人ひとりのニーズに合わせた支援を行うことで、子ども自身が幼稚園や学校で楽しく安心して生活できるようになる……。そんなヒント（支援メソッド1～25）がここにある。

【論文内容の紹介】

1 発達障害児への支援メソッドとは

今回の研究で発達相談センターが提唱する支援メソッド（方法・方式）は、発達障害児に対する特別支援教育の考え方や指導法を類型化してまとめ、2年間かけて実践し検証して有効性を確かめたものである。このような形にまとめたことで、私たちが子どもや保護者との相談・関わり・支援がとても容易になったと感じている。

2 相談から支援へ、だれもができる！

発達障害児に対する支援メソッド1～25は、だれもが問題解決できるように、次のような内容で対応別に大きく5つに分類した。

- (1) 発達障害児の理解と相談に関するもの
- (2) 子どもの指導・支援に関するもの
- (3) 保護者との関わり・支援に関するもの
- (4) 教師の指導・支援に関するもの
- (5) 二次障害の軽減に関するもの

3 支援メソッドの例（メソッド1）

《園や学校で発達障害児の置かれている辛い状況を理解する》
くさぼり、悪ふざけ、わざとじゃないんだ。これは僕たちの特性なんだよ・・・》

発達障害児は園や学校の中で“自己存在”を脅かされている。その理由は、

- ① 失敗が多い・褒められることが少なく周囲から注意され叱られることが多い。
- ② 親や先生の期待に応えられない・いつも褒められず、“心配される”存在である。
- ③ 偏見、差別を受けることが多い・みんなと同じようにできないことが多い、一般の子どもと違うと見られる。
- ④ いじめられることが多い・じゃまもの扱い、グループにいると迷惑がられる。
- ⑤ 自己存在の否定「ぼくはだめな子」・自尊感情や自己肯定感が低い子どもが多い。

4 研究のまとめ

(1) 二次障害は防ぐことができる！

私たちには発達障害児の誕生や増加を防ぐことはできない。しかし、発達相談センターに通ってくる子どもたちの支援を2年間継続してきて、自信をもって言えることが1つだけある。それは、『発達障害児の二次障害は防ぐことができる！』ということである。

そのために必要なこと、それは“周囲の人”の「理解と支援」である。

(2) だれにでもできる“支援メソッド”

発達障害児は、「相手の立場で物事を考えたり、相手の気持ちを想像したり、一度にいろいろなことを理解し行動したりすることが苦手であり、注意されたことをすぐに修正していく」ことがとても難しいのである。

そのことを家族や幼稚園、学校の先生にわかってほしい。そして、だれでも簡単にできる個別の支援方法があることを知ってほしい。

そのために必要なものが、本研究の“支援メソッド”なのである。

●奨励賞【論文概要紹介】

複数教材文の読みつなぎ と並行読書による 物語文読解学習の工夫

香川県高松市立香西小学校 かじみちこ
加地美智子

【実践の概要】

新しい学力観に立って、基礎基本を重視し、思考力・判断力・表現力を伸ばすための指導として、第6学年国語科・単元「強く語りかけてきたことを考えながら読もう—『平和』とは？『生きる』とは？」において、物語文読解学習の単元構成の工夫を試みた。

第一に、複数教材文の読みつなぎである。主教材文から自分なりの主題をつかんだ後、2つの副教材文に重ね、主教材文と読みつなぎことで、自分の主題観を確立した。

第二に、並行読書と単元を貫く言語活動である。単元の展開と並行して、自分の主題観と多くの図書を読み重ね、単元の終末でつくったミ

ニポスターの中に生かした。

学校行事との関連も図り、国語科で付きたい力、他教科の言語活動に必要な力の獲得とともに、読書生活の充実や平和・人権意識の高揚、生き方づくりの一助となる単元となった。

【論文内容の紹介】

1 テーマに迫るために

(1) 複数教材文の読みつなぎと並行読書を取り入れた単元構成

自分なりの主題観を心にもち、複数の教材文の読みを重ねることで、自分の選んだ作品を自分の主題に引き寄せて読むことも可能になる。主題という軸でつながった読みつなぎで、児童に学習の効果が期待できると考えた。

(2) 並行読書を推進するための環境整備

膨大な図書の中から、主教材文から読み取れるであろう主題に即した図書を集めてブックリストを作成し、本と並べて置いた。

(3) 並行読書を教材文とを結び付ける言語活動
ミニポスターづくりでは、主題観が明確に重なった図書1冊を取り上げることとした。

単元を貫く言語活動を位置付けることにより、常にゴールを見据えて学習に取り組めるとともに、多くの図書を読みながら、教材文と結び付けることができると考えた。

2 単元の具体的な取り組み

第1次

主教材文の「心に残った一文」を中心に初発の感想を書くことを知らせ、音読をした。

また、多くの児童が、ブックリストをもとに、教室前のコーナーから図書を読み始めた。

第2次

まず、主教材文を3つの場面に分けて読み取り、各場面からまとめた主題を「つながり図」に書いて見直した。同じような主題をつかんだ児童で小グループをつくった。

次に、主題を2つの副教材文に重ねた。教材

文を読んで、自分なりの主題観を表す文を加えるのに適切な部分を決め、会話文の形で書き加えた後、小グループで互いの書き加えた文をつなぎながら意見や感想を述べ合った。全体交流では、小グループでの対話で主題に対する考えの深まりを中心にした発言もあった。

第3次

自分なりの主題を重ねるのに最もふさわしい作品を並行読書した中から選び、題名と作品が最も強く語りかけてきたことにつながる文と、主題を入れたミニポスターをつくった。

読みつなぎと並行読書の効果が表れ、全員が自分の満足するミニポスターをつくり上げた。

3 単元の実践を振り返って

主教材文からつかんだ主題をもとに様々な作品と向き合うことで、文章全体や作品間のつながりをとらえることができ、さらに、単元を貫く言語活動で確かにつながっていった。

今後も、児童の側に立って教材の特徴やそれを生かす言語活動、育てたい力に応じた単元構成を行い、確かな指導を行っていきたい。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

児童の学習意欲を高める 社会科指導の在り方

～第6学年社会科単元の実践を通して～

宮崎県日向市立財光寺小学校 もりさきようすけ
森崎陽介

【実践の概要】

本年度から新学習指導要領が完全実施された。社会科においては「考えたことを表現する力の

育成」が新たに記載されたことから、児童に学習課題をより深く探究させ、内容理解につなげていく必要がある。そのためには児童の興味・関心を高め、学習意欲を引き出していくことが大切であり、指導方法や指導体制の工夫・充実が求められる。

そこで、単元構成や学習指導過程の工夫をしたり、地域素材を効果的に活用したりすれば、児童が学習意欲を持ち、主体的に学習に取り組むことができると考え、本主題を設定した。

【論文内容の紹介】

1 単元構成の工夫

単元の1単位時間の指導のつながりを意識するために、各段階のねらいを明確にし、単元の指導計画を作成した。

《学習課題》

- 日本が世界と戦った戦争とはどのような戦争だったのだろうか。
- そのころの人々はどのような生活を送っていたのだろうか。

段階	ねらい
導入	学習課題を把握し、知らないことがたくさんあることに気づき、学習内容に対する関心を持たせる。
展開	日本と日向市の2つの視点から本単元の学習課題を調べていき、事実を読み取るとともに、それを正しく理解させる。
終末	これまでの学習を生かし、本単元の課題について分かったことを整理させる。

2 学習活動の工夫

(1) 導入段階における手立て

教科書の写真から学習課題に対する予想を立てさせることで、内容への関心や学習全体に見

通しを持たせた。その際、1人調べからグループの話し合いにつなげることで、自分の気付いていないことや同じ写真でも色々な視点から見るができ、より想像を膨らまして展開につなげるようにした。

(2) 展開段階における手立て

各段階でねらいを明確にし、学習内容への追究意識を高めていった。

手立て	ねらい
課題の把握	地図や写真などの資料を活用して、課題に対する予想をさせることで、学習の見通しを持たせる。
知識の獲得	教科書の内容を押さえることと日向市の当時の状況を当時の写真を用いて照らし合わせることで、内容の理解を深める。
知識の再構成	理解した知識を振り返りながら、自分なりの言葉で再度まとめさせることで知識の定着を図る。 (実践例) ・教科書の写真を使って、中国との戦争の流れをまとめる。 ・当時の生活を短歌で表現する。
考えの明確化	学習内容への感想をまとめることで、事象への考えを明確にする。

(3) 終末段階における手立て

学習のまとめとして、当時の新聞記者になりきって新聞を作成した。教室には授業で取り扱った写真や資料を掲示したり、図書室から本単元に関する書籍を集めてきたりして、児童が効率よくまとめるために活用できる環境を整えた。

【まとめ】

児童の学習意欲の向上につなげるためには、単元構成・学習指導過程の工夫や地域素材の活用が効果的であった。今後は単元間のつながりを系統化して、児童が既習事項を生かせるような手立てを継続して行う必要がある。

●奨励賞【論文概要紹介】

政治が見える地域教材で、社会参画の資質や能力を育む社会科学習

東京都杉並区立堀之内小学校 よこたとみのぶ 横田富信

【実践の概要】

小学校社会科第6学年の「社会保障を取り上げた政治の働き」での実践である。

2005年の介護保険法の改正によって、日本全国に「地域包括支援センター」が設置された。本区にも20か所が設置されている。この地域教材を主として取り上げることで、高齢者施策を例にした政治の働きをより具体的に理解できる。

社会の課題を身近に感じつつ、自分なりに解決する方法を考えていくことで、よりよい社会の形成者としての資質と能力を育てていくことができると考え実践を行った。

【論文内容の紹介】

1 政治の働きが見える地域教材

ケア24（杉並区での地域包括支援センターの呼称）について、次の4つの視点で教材分析を行った。*括弧内は指導計画と関連

① 社会的背景が見える（1～4時）

・ケア24の設立の目的を調べることで社会的背景（高齢化社会の課題）をつかむことができる。

② 取り組む人々の姿が見える（5～8時）

・各機関での人々の取り組みによって高齢化社会の課題解決が図られていることをつかむことができる。

③ 政治の働きが見える（9・10時）

・国や都、区、議会などの連携によって施策は

成り立っているという政治の働きが見えてくる。

④ 未解決の問題が見える (11時)

・依然として高齢者の不安は完全には解消されていないことから、よりよい社会を目指して考え続けることの必要性を感じることができる。

2 学習過程の工夫：指導計画 (全11時間)

① 目指す児童像：自分に引き寄せて高齢化社会の課題をとらえている。

○高齢化社会の課題をつかみ、高齢者の思いや願いについて話し合うことを通して、学習問題を考える。(1～4時)

学習問題

高齢者の願いをかなえるために、誰がどのような取り組みをしているのだろう。

② 目指す児童像：高齢化社会の課題に向けて行われていることについて、解釈をしたり自分の意見をもったりしている。

○ケア24の取り組みや、区・国・都・区議会とのかかわりを調べる。(5～8時)

○各機関と高齢者とのつながりを関係図に表す。関係図をもとに、高齢者施策をキャッチフレーズで表し、政治の働きをまとめる。(9・10時)

③ 目指す児童像：よりよい社会の形成へ向けに必要なことを、自分なりに判断している。

○高齢者の悩みと原因について話し合い、高齢者施策に関して自分ができることを考える。

(11時)

3 児童の変容

「政治の働きが見える地域教材」と「学習過程の工夫」によって、以下のような変容が見られた。はじめは「高齢化が進むと私たちに掛かる負担が大きくなる (1時)」、次に「高齢者はこれから大人になる私たちが支えなくてはならない (4時)」、「たくさんの機関のつながりは高齢者を助ける大きな力になっている (10時)」、そして「(依然としてある高齢者の不安に対して) 今回作ったポスターによって『心配』な気

持ちを抱える人が、一人でも減ったらよい (11時)」と児童の考えが変容している。課題を自分に引き寄せてとらえ、高齢化社会とかかわる責任感をもち、政治の働きを理解した上で、よりよい社会の形成にどのようにかかわっていったらよいかを考えられるようになったと言える。

【まとめ】

「よりよい社会の形成」を考えることのできる教材を開発できたことに加え、児童像と関連させながら、適切に指導計画を立てることができた。これらの手立てによって、児童が思考・判断したことを表現する力や、「よりよい社会の形成」へ向けて取り組もうとする態度を育むことができたと感じている。

今後も、児童が「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を身につけていける教材を開発していきたい。